



だより



R8.4.28 Vol.4

チラ見

校長室の入り口の窓からチラ見をしてくる子供たち。運動場側の窓から覗いてくる子供たち。決してこれっぽっちも新鮮味はないしょくれたおじ(い)さんなのですが、子供たちは少なからず『今度の校長先生はどんな人?』と興味もあるのでしょうね。一人一人に説明して回るのもタイプが悪いので(笑)、自己紹介をここで。

○とりあえず「一緒に遊ば!」と声をかけてくれたら、年齢の動きしかできませんが、遊びます。

○「一緒に歌お!」と言ってくれたら弾ける曲であればウクレレ片手に駆けつけます。

○「なんかおもしろいこと言って」と言われたら、「真っ白い犬がいたんだって!尾も白い!」程度の極寒のお話ならばいくらでもできます。

子供たちのみなさん!どうぞよろしくお願いします。

思いやり

全校児童の前で話す機会があったので、挨拶について少し触れました。「自分がしっかり声を出して挨拶しているのに、相手が返してくれなかったらどう思う?挨拶って礼儀でもあるし、相手の気持ちを考える思いやりでもあるんだよ。」私の考えを驕の面からも少し…。「まだ子供だから。」このフレーズをよく耳にします。でも突然「今日から大人だよ!」というスイッチが出てくるわけではありません。「子供だから」ではなく「子供のうちから」この考えが大切だと私は考えています。もちろん、すぐできないこともあるでしょう。しかし「あ!だからあんなにうるさく言ってたんだ…!」と子供たちがいつか気付く日はきっと訪れると思います。うるさく言うことも驕であり、同時に思いやりであると思うのです。

四方山話松蔭 ver. 其の四(嫌いです…)

これまで校長として勤めた学校でも、再三再四言ってきました。「私はデジタルが嫌いです。」とはいえ、私の日常生活はデジタル三昧です。(笑)教育界ではデジタルとアナログのベストミックスが唱えられており、私もそれに異を唱えるつもりはありません。ただ子供たちの日々の生活の中にデジタルが入り込みすぎていることを危惧するのです。『自分はデジタル三昧のくせに?』と首をかしげる姿が目に見えてくるのですが、大人ではなく子供。特に幼少期から児童期にかけての子供たちがアナログ(自然や人)と関わる時間をどれだけ多く持てるか!これは子育てにおいて欠かすことはできない要素だと思います。否!欠かしてはいけないことです。

乳幼児の行動を見ていると、とりあえず物を口に入れてみたり、落ちている何かをつかんでみたり、自分の身体を使って、外の世界を確かめています。這い這いができ、歩けるようになると行動範囲は一気に広がります。外では石つぶてを拾って触ったり、投げたり、隙間に落としたり。水たまりがあれば迷わず入り、足踏みも続けたり。同じことを何度も繰り返します。その中で相手の表情を読み取り、自分と他者の距離感を知り、物の量感や質感、そして自然の法則をその小さな身体で理解しているのでしょう。

算数の「図形領域」で、立体を様々な角度から俯瞰できるデジタルのシミュレーションソフトの活用はとても有効です。しかしそれも、子供たちがアナログな生活経験の中で「自分たちが住む世界は三次元である」と無意識に理解しているからこそ成り立つ学びなのです。

最近「一番の相談相手は『生成AI』です。」と答える人も少なくないと聞きます。私もよく使うので、その気持ちはとても分かります。(この話はまた次回…)しかし、人は、本来、周りの自然や人と関わりながら命をつないでいく存在です。その基礎を学ぶこの時期こそ、便利さに流されすぎず、子供たちには“水たまり遊びと泥んこ遊びのアップデート”も忘れずにいてほしいと願うのです。

----- 切り取り線 -----

便りの感想や学校への要望等ありましたら、お聞かせください。今後の学校経営・運営に役立てていきたいと思ひます。